

バルタザール・ガールゴ



イエス会日本布教の中心都市だった豊後府内(大分市) 2020年10月、東方から航空撮影

府内に「豊後教区」を創始

大友時代を 生きた人々

鹿毛 敏夫

日本にキリスト教を伝えたフランシスコ・ザビエルは、天文18(1549)年7月から同20(51)年10月までの日本滞在を終え、アジア宣教の本拠地インドに戻りました。では、ザビエル後の日本布教は、どのように進められたのでしょうか。

ザビエル出国の翌天文21(52)年、パードレ(司祭)のバルタザール・ガールゴが、ドウアルテ・ダ・シルバとベドロ・デ・アルカンバの2人のイルマン(修道士)と共に豊後府内(大分市)を訪れます。そして、翌天文22(53)年、ガールゴは領主大友義鎮(宗麟)に面会し、府内での布教許可を得るとともに、教会建設用地の寄進状を獲得しました。

16世紀後半期の府内を描いた古図では、その最も西側を南北に貫く大路の中央辺りに、「キ

リシタンノコト タイウスドウケントク寺」と呼称する祠が描かれています。「タイウスドウ」とは「デウス堂」、すなわち、豊後府内のキリスト教会のこと、人々からは「ケントク寺」という寺院名で呼ばれていたことがわかります。大友氏の館を含む中世の府内の領域には、現在でも、「顕徳町」と呼ぶ町名が残されており、イエズス会の府内教会「ダイウス堂顕徳寺」が建立されたのは、現在の大分市顕徳町2丁目にあたります。

ルイス・フロイスの「日本史」には、この土地について次の記録があります。「国王は司祭に司祭館(カーザ)を建てる敷地を与えた。聖マリア・マグダレーナの祝日の前日、司祭はそこに、キリシタンたちとともに、そしてその新しいキリシタン宗

団の祈りと熱意のうちに非常に高い一基の十字架を建てた。この最初の年に、府内の市、およびその周辺で三百名ないしそれ以上の人たちが受洗した」

ガールゴらは、大友義鎮から寄進を受けた土地に大きな十字架1基を建立し、ここに豊後府内のキリスト教界が創始されたのです。敷地には、大十字架に加えて、教会、司祭館(修院)、墓地も整備され、府内キリスト教界としての諸施設も整っていきます。

ガールゴが弘治元(1555)年にイグナティウス・ロヨラらに宛てた書状では、豊後に1500人の信者がいて、「毎日あるミサと説教にいつも出席している」と記しています。このように、日本イエズス会は、大友義鎮本拠の「豊後教区」を中心に、大坂・京都の「都教区」、西九州の「下教区」の、3分割した宣教組織でその後の日本布教を進めていくのです。
(名古屋学院大学国際文化学部教授)

11月1回掲載